

Fate/stay night KUR NU GI A

夜はねこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ネタはあげるから誰か書(描)いてくれシリーズというpixivで投稿しているものの中から『Fate/stay night KURUNUGIA』をピックアップしました。

元の概要は、『ネタは渡しますので誰か代わりに書(描)いてください。漫画でもイラストでも小説でもなんでも良いです。ちよつとアレンジしても良いです。それは貴方の作品になります。コメントのところにも書(描)きますとコメントしてください。全力で見に行きます。崇め奉ります。感謝しかありません。私は文才(絵心)がないので書(描)けません。どうかよろしくお願いします。』というものです。

※ええ、書いていただける方がいらつしやるならば、pixivの方の私に是非コメントしてください。これはあくまでネタを提供しているだけであつて、小説として読まないでください。必ず続くとは限りません。じゃあ私、お前の代わりに書(描)きます!という心の広い方、いませんか!?!?

本作に登場するキャラクターたちには、作者の独自解釈、二次設定、願望、欲望、性癖、趣味嗜好をかなり含まれています。

遠坂凜の双子の姉に転生した少女がある出来事によりデミ・サーヴァントになつてしまうお話です。

目次

設定	1
運命の夜	7
日常	10
2月1日	13
I F	16

設定

プロフィール

名前 遠坂恵麗

愛称 エレ

性別 女性

誕生日 2月3日

星座 水瓶座

血液型 O型

身長 159cm

体重 47kg

スリーサイズ B78/W57/H80

イメージカラー 黒

特技 園芸

好きなもの 花、妹

苦手なもの 突発的なアクシデント

天敵 ギルガメツシュ、間桐臓硯

CV 植田佳奈

概要

穂群原学園の2年A組所属。生徒会書記。遠坂凜の双子の姉として転生してしまった少女。

エレは魔術の才能は皆無で魔術回路も持ち合わせていなかったが、ある出来事により、デミ・サーヴァントとしての覚醒と前世の記憶を思い出してしまう。

容姿

容姿は双子の妹である遠坂凜にそっくりである。しかし彼女とは違い、輝くような金髪である。あと凜より若干胸が大きく見える。遠坂凜が黒のリボン、赤いコートであるのに対してエレは赤いリボン、黒のコートである。

覚醒してから目の色が赤色に変わった。デミ・サーヴァントととし

ての服装は、黒いドレスを身に纏いメスラムタエアが実体化している。

人物

受動的・内向的な性格。高い知性と誇りを持つ。

生真面目な秀才、恋にも真剣な少女。孤独・孤高で責任感が強い。

高いプライドと低い自己評価が同居するネガティブな優等生で、容姿端麗、文武両道、才色兼備。しかし、わりと泣き虫。

他人に厳しく、自分にはもつと厳しい。

デミ・サーヴァントになったからか、エレシユキガルの人格にひっぱられがちだが、彼女自身の人格もしっかり残っている。そのおかげか遠坂凛との姉妹関係は良好である。

ほぼ凛と同じ台詞回しではあるが、ところどころで上品なお嬢様口調になる。ふと素直になったり、パニックになったりした時に「くなのだわ」と語尾が大げさになる。

かなりのシスコンで、間桐臓硯絶対殺すウーマンである。

過去

魔術師の家に生まれながら、魔術回路を一切持たないことに幼いながら絶望し、凛や桜に嫉妬と羨望を抱いていたが、桜が養子になったときにそれは変わる。

魔術師というよりも魔術という存在が嫌いになり、これがなければ聖杯戦争なんてものは起きず、家族バラバラにならず普通に生活できたのと思っている。

能力

魔術回路もなく、魔術の才能もなかったがある出来事により、冥界の女神であるエレシユキガルの権能を使えるようになった。

相手を自らの固有結界(冥界)に落とすことができる。「冥界に限りエレシユキガルの法と律には神であろうと逆らえない」という性質により冥界の存在に対しては強大な力を持つ。対抗するには生者でなくてはならない。

その手に持つ槍はネルガルから譲り受けた太陽の権能、「発熱神殿

キガル・メスラムタエア」。その赤雷を纏った槍を自在に操る。また、檻を鐘のように鳴らすことで恐竜の化石を召喚することができる。

遠坂家の遺伝的特質として、詰めが甘く肝心なところで凡ミスを犯すという欠点を持ち、そこはやはり時臣の血を継いでいるといえる。通称「うっかり」。しかし、凜以上にぽんこつ属性が前面に出やすい。

元は魔術師でなかったため、凜と違って重度の機械オンチではない。普通に使いこなせる。

ステータス

筋力・耐久・敏捷・魔力・幸運・宝具

A・B・D・B・B・A

保有スキル

対魔力(D)

魔力に対する耐性。Dランク以下の魔術を無効化する。冥界の陰気にひたされた事で死が日常化してしまい、対魔力が著しく下がってしまった。

陣地作成(A+)

冥界の七門を自在に呼び出す。エレキシユキガルが立つところ、即ち、死が容易に振る舞われる冥界となる。

女神の神核(B)

生まれながらに完成した女神であることを表す、神性スキルを含む複合スキル。精神と肉体の絶対性を維持する効果を有する。精神系の干渉をほとんど緩和し肉体の成長もなく、どれだけカロリーを摂取しても体型が変化しない。ただしデミ・サーヴァントであるためランクはB止まりとなる。

秘められた大王冠(A)

イシユタルから取り上げたとされる宝によって作られた女神の冠。天と地、表裏一体の女神としてイシユタルの持つ様々な権能を己のものとするが、その効力は若干、暗い(陰気)ものに変化している。

魔力放出(檻)(A+)

エレキシユキガルは勤勉で真面目、そしてやや根暗な女神である。彼

女は普段から暇さえあれば魔力を檣檻に蓄えており、戦闘の際、それを使用する。

冥界の護り (EX)

冥界の柱として捧げられ、支配したエレシユキガルの権能。その終わりまで冥界を続けた彼女は冥界そのものであり、また、冥界に護られる女王となった。味方全体を支援し、また、彼女の宝具の性能を変化させる。

宝具

霊峰踏抱く冥府の鞆 (クル・キガル・イルカルラ)

ランク：A

種別：対山宝具

レンジ：10～999

最大補足：1000人

大いなる天から大いなる地に向けて放たれるものではなく、地の底から地続きに行われる冥界の女主人の鉄槌である。

地震、地殻変動によってエビフ山脈を崩壊させるアースインパクト。宝具の神髄は『地形を冥界にする』事にある。

冥界であれば絶大な権力を持つエレシユキガルは、彼女と共に戦うもの、そのすべてに強力な護りを与える事だろう。

真名

メソポタミア神話に登場する冥界の女神。

クタの都市神。冥界の女主人エレシユキガル。

エレシユキガルという名前は「キガル（大いなる地、冥界）の女主人」という意味。

シユメール名はエレシユキガル、別名はイルカルラ、ベリリ。アツカド名はアルラトウ。

アツカド王朝時代末期のウンマ市のルウトウ王はエレシユキガルの神殿を建立し、王碑文の中で「日が沈む所の女主人」の美称を用いている。

神話においてはイシユタルの姉ではあるが、『イシユタルの冥界下り』等のエピソードから、姉妹仲は非常に悪いと言われている。

人間関係・関連人物

stay night

遠坂凜

双子の妹。昔は自分より優秀な彼女を見て羨望と嫉妬抱いていたが、桜が養子になってからそうではなくなった。しかしエレシユキガルのデミ・サーヴァントになってからたびたび凜がイシユタルに見えることが多くなり困惑している。しかし仲は良好。

アーチャー

凜が召喚したサーヴァント。凜とよく口喧嘩しているのを見て微笑ましく思っている。

衛宮士郎

同じく成り行きで聖杯戦争に巻きこまれた隣のクラスの少年。凜は君付けで読んでいるが、エレは呼び捨てである。

間桐桜

没落寸前の間桐家の養子に出された妹。とても仲の良い姉妹だったが、協約により彼女と深く関わることは禁止されていた。このため、本編開始時にはお互いに他人の振りをしている。しかし、自分は魔術師じゃないからオツケーという謎の行動によりめげずに桜に話しかけていた。桜こそ最初は困惑していたものの、今ではそこそこ話すようになった。しかしまだ距離はある。

言峰綺礼

兄弟子。時臣亡き後、凜たちの後見人となる。煩わしく反発している一方で、魔術に才能のないエレに八極拳を教えてくれた人でもある。しかし、エセ神父呼ばわりすることもあるなど基本的には信用していない。父の仇でもあるが、桜を養子に出した父親をそこまで気に留めていないので、恐らく憎しみはない。

三枝由紀香

親友。唯一、エレをエレちゃんと呼ぶ人物でもある。彼女つながり

で氷室鐘、蒔寺楓とも仲良くなった。

美綴綾子

凜の親友。友人。

柳洞一成

生徒会長。凜とは仲が悪いが書記を務めてるだけあってエレとの仲は良好。似ているが本質的に違うことを見極めてる様子。

ワカメ（間桐慎二）

妹の義兄であり親友の部活仲間。凜に歪んだ好意を寄せているので好きではない。なんなら桜にひどいことをしてるので嫌い。勿論彼も呼び捨てである。

間桐臓硯

死ね!!?

キャスター

青いローブを纏った男。エレ自身がランサーのデミ・サーヴァントになったことにより、こちらはキャスターになっている。メディア？誰のことかな??

ギルガメツシュ

アーチャーの彼には「よつぼどのアレか勇者でないと話も通じない暴君」として半ば諦めの視線を向けている。せめてキャスターの「落ちついた頃」のギルガメツシュになってくれないかなあ。

アサシン

黒い塊。即退場。good luck!

運命の夜

走る。走る、走る、走る。ただひたすらに遠坂恵麗^{エレ}は暗い夜道を逃げていた。

生徒会の仕事で、少し遅くなった帰り道。黒い塊と青いローブを纏った男が戦っているのを見た。しかしそれは人ではない、ナニカだった。アレは怖くて恐ろしいものだ。逃げなくてはいけない。

走って、走って、走って。その先は行き止まりだった、絶望。

「

黒いローブを纏い、髑髏を模した白色の仮面のナニカが私に話している。恐怖でもはやソレが何を話しているかもわからなかった。異様に長い腕に意識もいかない。

短刀が振り下ろされる。嫌だ、死にたくない。まだ凜と一緒にいたい。それにあの子ともう一度笑い合いたいのに……。私が魔術を使えば何とかなつたのかしら、と思う。ああ、駄目だ。こんなときに、嫌いな魔術を頼るなんて。でも。だけど……。『諦めるの?』どこかで声がする。諦めたくない!!? 私は、まだ死ぬわけにはいかない!!?。

カッと光が自分の体に集まる。

黒い塊は一度距離を取り、後ろに下がった。向こうも驚いただろうが、一番驚いたのは私自身だ。しかし驚くことに、自分の口からすららと言葉が出た。

「サーヴァント・ランサー。召喚に応じ参上したわ。一個人に力を貸すのは不本意だけど、呼ばれた以上は助けてあげる。感謝なさい。」
「ランサー…だど?まさか…そんな…先程までただの人間だったはず…」

そう、黒い塊の言う通り。私は人間。のはず。

「…。……。……。つて、何コレエ!」

もう一度言おう、一番驚いているのは私だ。

自分が身に纏うは制服ではなく、黒いドレス。いや、姿を確認しなくてもわかる。これは、この霊基は。冥界の女主人、エレシユキガル。そして自分の前世を思い出す。いや、正確には自分に前世というも

のが存在していることを、だ。詳しくはわからない。ともかく、自分には前世があつてこの世界はゲームやアニメになったものだという。エレシユキガルはその『Fate』シリーズの別のゲームに出てきた存在であること。

それから、自分が遠坂凜の双子の姉で、魔術回路のない遠坂家の劣等生が何故かデミ・サーヴァントになっている。マスターも自分自身。意味がわからない。

困惑と疑問と驚きでいっぱいだったが、まずは目の前の黒い塊——アサシンをどうにかしなければならぬ。

お互い時が止まったように固まっていたが、私はやっと口を開く。

「こうなったからには仕方ありません。戦うからには手加減はできないわ。覚悟なさい！」

そう言ったことでやっとアサシンも我に気づいたらしい。短刀を構え直している。

「いいわ、地の底まで落としてあげる——」

一瞬のことだ。自分の5本の神槍が浮かび上がり、そして放つ。アサシンは短刀で槍を弾くが腕に一本突き刺さる。すかさず、私は腰につけていた鳥籠を鳴らす。地面から冥界の怪物が顎を開き、アサシンを呑み込む。そのまま口を閉じて冥界に引きずり込んだ。

「何!？」

固有結界。いくらエレシユキガルだとしても、元はただの人間なのだ。本当のエレシユキガルのように冥界に落とすことはできない。魔術回路も持っていなかった私がコレをできるのは彼女のおかげではあるが。

「お願い、メスラムタエア!冥界の護りを知りなさい!出でよ、発熱神殿!これが私の『霊峰踏抱く冥府の輔クル・キガル・イルカルラ』!!」いきなり宝具を使うとは思わなかったのだろう。

「ぐああああっ!こんな……はずでは……!」

消滅していくアサシンに問う。

「ねえ、あなたのマスターは間桐臓硯?」

問いかけても返事はない。

「そう……いいわ。教える気はないのね。さようなら、アサシン。」

完全に消失したアサシンを見届け、固有結界を解くと、着ていたものも制服に戻っていた。どういう原理なのか。視界の隅で蟲が動く。

「…… 間桐臓硯。いえ、マキリ・ゾオルケン。聞こえているのでしよう？…… 貴方、殺すわ。」

殺意を向ける。これは、遠坂恵麗でもエレシユキガルでもない感情だった。『わたし』の感情だ。いや、桜のことを気にかけている遠坂恵麗と既に同化していた。前世を思い出す……この世界を思い出すことは全てを知ることと同義だ。あの子……桜を助けるのは偽善かもしれない。私の我儘かもしれない。桜にとっては迷惑かもしれない。彼が先に助けるかもしれない。だけど、あの男だけは殺さなくてはいけない。そう思った。

ふと我にかえる。……このデミ・サーヴァント化について凜にどう伝えようか。そう思うと一気に殺意が焦りに変わる。

ともかくもう遅い。私は急いで家路についた。

日常

「……。」

生徒会室では花瓶に入った花が一輪飾られている。そういえばどの教室にも必ず花が一輪あるな、と思います。

「ん？どうした、衛宮。花を見つめて。」

生徒会室で無心に花を見つめている衛宮士郎に柳洞一成は問いかけた。

「え？いや…意識したことなかったけど、この花って誰が置いてるんだろうって。この校舎の全教室に必ず花を置いてるだろ？大変じゃないのかなって。」

「なんだ、知らんのか。」

「え？」

意外そうに呟く柳洞に衛宮は驚いた。

「知ってるのか？」

「割と有名な話だぞ。それに知ってるものにも、遠坂は生徒会の書記だからな。花についてもわざわざ置いてもいいか聞きにきたぐらいだ。」

「遠坂？」

衛宮の疑問に柳洞は顔をしかめた。

「おい、衛宮。間違ってもあの女狐のことではないぞ、遠坂凜じゃない。似ているが本質が違う。その双子の姉の……」

そのとき生徒会室の扉が開いた。金色の髪の彼女は何故か、スコップやら手袋やら長靴やら、肥料までを片手に抱えて立っていた。

「ええと、取り込み中だったかしら？」

遠坂恵麗。件の遠坂凜の双子姉である。彼女は柳洞と衛宮を見て首をかしげていた。

「いや、平気だが、それは？」

「花壇に花を植えようと思って…。その許可をもらいに来たのだから。」
何やら気恥ずかしそうに、視線を彷徨わせている。衛宮は遠坂凜と

も遠坂恵麗とも今までまともに会話をしたことはなかったが、確かに双子であろうと、本質は違うのかもしれない。

「別に、構わんぞ。」

「……何の花を植えるんだ？」

「へ!？」

いきなりほぼ初対面の衛宮に話しかけられて驚いたのだろう。彼女は手に持っていた荷物を全て落としてしまった。

「あ、悪い」

驚かせたせいだと自負し、拾うのを手伝う。

「……ブーゲンビリア？」

種の袋に書いてあった名前を読み上げる。いかんせん、衛宮は花の知識に乏しく、その花がどういうものか理解できなかった。

「魂の花、とも呼ばれるな？」

「ええ、柳洞は知ってるのね。」

「どんな花なんだ？」

「それは咲いてからのお楽しみなのだわ、ええと、衛宮！」

そういえば、名乗っていなかった気がする。

「ああ、うん。衛宮だ。衛宮士郎。」

「そう、私は遠坂恵麗。…それじゃあ、私はこれで。」

「ああ。」

嵐のようだったが、彼女はよほどブーゲンビリアという花が好きらしい。優しい微笑みだった。

衛宮士郎主人公との初会合が生徒会室にて園芸セットを持った状態で、というのは些かどうなのだろうか。

それはそれとして、凜には未だ自分がデミ・サーヴァントになったことを伝えられていなかった。普段は人間なのだ。あの時は殺されそうになって必死にあの状態になったという感じだった。簡単にいえば、どうやってあの姿になるのかがわからなかった。伝えられたとしても、その証拠がないのだ。どうしようもない。

あれこれ考えて花壇に向かっていると、見慣れた自分の半身がこつちに向かつて歩いており、思わずかけよった。

「凜？珍しいわね、いつもより早いじゃない。」

「家の時計、一時間ズレてみたいなのよ。そういう、エレは……また花いじり？」

昔、私はいつも自分より早く出て行く私に何をしているのか凜に問い詰められたことがある。花のことを言えば呆れたようだった。

「は、花いじりという言い方はやめてほしいのかわ!!？」

「はいはい、頑張つてね。」

これではどちらが姉かわからない。だが仲が悪い訳ではない。

しかし、時計の時間がずれていたアーサーということは今日は凜がアーチャーを召喚する日なのだ。そのことを頭の片隅に残して私達はわかれた。

2月1日

居間の方から爆発音がして目が覚める。大方、凜がサーヴァントの呼び出しに少々失敗した音だろう。

しかし、サーヴァント召喚など知らない魔術の魔もわからないような遠坂恵麗がしなければならぬ行動はひとつだった。

「凜！何があつたのかしら!？」

居間の扉が倒されており、居間の天井はボロボロ。床は瓦礫にまみれ。そんな現場を見てエレは顔を青ざめる。女優になれるかもしれない。

ちよつと凜とアーチャーが話終わつたらしい。アーチャーの顔は見えなかったが、凜のやばいといった表情が見てとれる。

そして、謎の男性と凜の密会。それに遠坂恵麗は、

「……………ええと、お幸せに?」

「ちよつと待て!」

部屋をあとにしようとしたエレを、凜は全力で引き止めた。

「何を勘違いしてるか知らないけど、これはサーヴァント召喚!!? 聖杯戦争よ! 前説明したじゃない! ……あれ? 説明したわよね、私!?!」

「さーぶあんど? うーんと、うん。せーはいせんそーはわかるのだから!」

「説明してなかった!?!」

賑やかな会話を織りなす彼女達を見て、しびれを切らせたアーチャーが凜に問いかける。

「凜、彼女は?」

「え? ああ…双子の姉よ。エレ、アレはアーチャー。」

「ええと、遠坂恵麗なのだよ。よろしくね、あーちやー。」

「ああ。」

アーチャーの中にマスターの姉とはいえ、サーヴァントもわからない少女をここに残しておくのはどうなのか、という疑問が残る。

「ま、そういうことでアーチャー。最初の仕事だけ!」

「早速か。好戦的だなお前は。それで敵はー」

？何処にいる、なんて続けるアーチャーの前に、凜はポイツとハウキとちりとりをアーチャーに投げつけた。

「下の掃除、お願い。私も明日学校があつて休息を取らないと行けないし、これから簡単にエレに説明と今後のことについて話さなきゃいけないし。」

「ー」

？呆然とするアーチャー。

？内容の理解に苦戦し、待つこと五秒。

？思考を取り戻したアーチャーは、ハウキとちりとりを強く、握りしめた。

「待て、お前はサーヴァントを何だと思っている」

「使い魔でしょ？」

「ー」

？その言葉を飲むアーチャー。

？

「ちよつと待った。何故私がこんなことー」

「アーチャー。これ、マスターとしての命令……。貴方と私はサーヴァントとマスターなんだから、しっかり私の話は聞き分けないと。ね？まあ、貴方はその程度じゃどうってことないだろうけど、私の疲れは明日以降の貴方に直結するのよ？そんな状態の私を戦闘に駆り出すのも、自殺行為じゃない？」

？

「…ッ、地獄に落ちろ、マスター。」

苦虫を噛み潰したような顔をしたアーチャーに凜は不敵に笑って

「エレ、行くわよ。」

「えっ、でも手伝ったほうが…」

「いいのよ。」

エレの手を引いて去っていく己のマスターを見てぼんやり思う。勿論、髪色などの細やかな違いはあるが容姿は瓜二つであった。双子

であるので、当然といえばそこまでなのだが。…しかし、根本的な面は全く違うようだ。あの二人の性格を足して2で割れないだろうか、と考えながらアーチャーは掃除を開始した。

高い知性と誇りを持つあまり、冥界の主人という役割に殉じてしまい、がんじがらめになってしまった。美しいものを妬み、醜いものを笑い、欲しいものは他人の手に渡らないよう殺してしまう。

植物の成長と腐敗を司り、蛇や竜を使役し、冥界の使いであるガララ霊を自在に操る。そして槍のような檻を自在に操り、ある時は敵を串刺しにし、ある時は魂を閉じ込め、ある時は稲妻を起こす。

地上の光も彩りも温もりも、一切冥界には届かない。けれど、せめていかな汚辱や苦痛にも苛まれることのない清浄なる静謐を。メソポタミア世界の全生命が最後に辿り着く霊安室、その平穏と安寧を保証した。

しかし、地上と自由を知る事なく神代と共に「私」は消えた。

「夢か……」

エレはそう呟きながら目を覚ます。これはきつと女神エレシユキガルの過去だろう。デミ・サーヴァントになったとはいえ、他人の記憶を盗み見ているようで気分はよくない。

結局、あの後凜に聖杯戦争の説明を長々と聞かされた。言葉を挟む余裕はなく、自分がデミ・サーヴァントになってしまったことは言えなかった。

そんなことを考えながら階段を降りリビングへ向かう。時刻は午後7時。学校を無断欠席してしまった。

「凜の説明ってわかりやすいけど、流石に疲れたのだわ」

リビングにはだれもいなかった。おそらく凜とアーチャーは下見に出かけたのだろう。リビングの椅子に座る。まあいいか、これでゆっくり…。ゆっくり？

「……ちよつと待って。よく思い出しなさい、遠坂恵麗。今日って確か衛宮が……」

ガタツと音を立てて立ち上がる。が、また座る。そうだ、私が行って何になるのだろうか。私がいなくても物語は滞りなく進むだろう。むしろ行けば邪魔になるかもしれない。

「ん？でも私はランサー……。つまりクー・フリーンがいない？」

それは困る。あ、いや勿論、衛宮士郎に死んでほしいとかではない。原作の衛宮士郎は、夜の校庭で争うランサーとアーチャーを目撃して、ランサーに心臓を一突きにされて即死寸前の致命傷を負い、凜に蘇生される。

しかし、衛宮士郎の生存を察知したランサーに再び襲われ、逃げ込んだ土蔵で偶発的にセイバーを召喚し、争いを収めるべく魔術師同士の殺し合いにその身を投じることになるのだ。

もし、衛宮士郎がセイバーを召喚しなかったら？もし彼が聖杯戦争に参加しなかったら？彼がいなければ救えた命も救えないかもしれない。

そんなありとあらゆる『もし』が頭の中で、浮かんでは消える。

「ああもう！考えるのも面倒なのだわ！とにかく行けばいいのよ！」

立ち上がり準備する。行ってから考える。これでいい。足手まといになるのが、取り越し苦労になるのが、まずはその場所に向かうことから始めよう。